聖杯を抱きしモノ

友希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖杯を抱きしモノ

【Ｎコード】
Ｎ９２３３Ｏ

【作者名】
友希

【あらすじ】
大風呂敷を広げてしまった作品です。
ＦａｔｅＥＸＴＲＡに於ける聖杯戦争を舞台として物語を始めます。
マスターの危機に呼び出されたのは黄金の髪を持つあの剣士だった！
まぁそんなお話です。

追記：自ブログの方でも同作品を掲載しています。

よろしければいらしてください。

URL：http：／／crimsonworks.blog71.fc2.com／

はじめに

こんにちは。

『人形はいつかたどり着いた』の修正を行っていたところ、完全に別主人公の作品が出来上がってしまい、とりあえずアップしました。

月での聖杯戦争を舞台にした物語ですが、ＥＸＴＲＡは物語のプロローグでしかないという罠。

相も変わらず大風呂敷を広げていますが、『人形はいつかたどり着いた』よりは明確に目標が定まっている分書きやすいです。

とはいっても、完全に『人形はいつかたどり着いた』とは別作品になってしまったため、『人形はいつかたどり着いた』の方は改めて修正していきます。

しばらくはこちらの更新になるかもですが、ご了承ください。

それでは。

第一話（前書き）

本作品はＴＹＰＥ－ＭＯＯＮ作品のＦＦです。
一部設定改変や独自解釈などがありますので、その旨ご了承ください。

第一話

キーンコーンカーンコーン……

一日の終わりを告げる鐘が鳴る。

俺は教科書をカバンに入れ、帰り支度を済ませた後、何の気もなしに教室を見渡した。

紅く染まった教室。

グラウンドから響くのは野球部の掛け声だろうか？

教室の端には何が楽しいのか、時折キャッキャと笑いながら話し込む少女たち。

机に向かい、ノートを広げる勤勉学生。

荷物を手に、何かに急かされるかのように教室を出て行く同級生。

酷く穏やかで、ありふれた日常の風景だ。

ここには一切の悲劇が存在しない。

あるのは、思春期の少年少女の青い感情だけだ。

明日への憂いは授業で当てられるか否か。

不満はといえば父親が一緒の洗濯機に洋服を入れたとか、その程度のものだ。

平和な世界。

それは万人が望む共通幻想であろう。

ここ『大和学園』はそんな理想の『世界』だ。

……であるのに、どうしてだろか？

俺はこの世界がどうしようもなく歪で、不完全なモノであると『理

解』してしまっている。

理性ではない。

もっと深い部分。

おそらくは本能的な部分でこの『世界』のおかしさを感じているのだと思う。

――ザザァ　ザザザザァ――

思考にノイズが走る。

酷く鈍い痛みが頭に走る。

『世界』が急激に色を失っていく。

先ほどまでの喧騒が嘘のように静まり返る。

――――ザザァ　ザザザザァ――――

頭の痛みは収まるどころか、際限なく強まっている。

――――万力で締め付けられればこんな感じなのだろう――――

頭の痛みとは別に、酷く落ち着いた思考でそんな事を考える。

ふと、気がつけば教室には俺一人しか存在していなかった。

キーンコーンカーンコーン……

再び鐘がなる。

一日の終を告げる鐘が。

その鐘を聞いた瞬間、頭痛は最高潮に達した。

と、同時に唐突に理解する。

……あぁ、そうか。

ここはつまり『理想の箱庭』なのだ。

平和であるのは当然だ。

何故ならそう『創られた』から。

くだらない争いで折角の『観察対象』を失いたくはないから。

つまりはそういう事なのだろう。

と、まとまらない思考の中で考える。

どうしてそう思ったのかはわからない。

そもそもこの思考が自分のモノであるのかどうかもわからない。

……それでも、確信する。

自身の違和感は、『世界』が歪であるという本能は正しかったのだ、
と。

そう確信した瞬間、

――ピシリ――

と『世界』（自分）がひび割れる音を聞いたような気がした。

第一話

目覚めは速やかだった。

布団から這い出、顔を洗い、朝食を取り、服を着替え、歯を磨く。

それをルーチンワークのように淡々とこなし、気がつけば通学路を歩いていた。

いつもの登校風景。

いつもの自分。

そんな代わり映えのない日常。

寒くもなく、暑くもない。

晴れているわけでもなく、雨が降っているわけでもない。

そんな曖昧な今日。

が、少し雲が出ているからだろうか？

今日は朝からずっと頭痛がしている。

出かけに薬でも飲んでくれば良かった。

そう痛感する。

痛みは学校に近づく程に強くなっていく。

まるで学校に行くことを拒んでいるかのように。

――――ふっ……クックックックック――――

唐突に、道路の真中で笑い始めた自分は危ない人に見えるのだろう。

そう理解していながらも笑いを止めることが出来ない。

それは、自分のおかしな考えに向けられたものでもあったし、

もう一つ、重大なことに気がついていなかった自分への嘲笑でもあった。

……さて、俺は何処から登校してきたのだったっけ？

気がつけば目の前に大友正雄が立っていた。

生徒会特有の黒い制服に身を包んだこいつは、俺の友人らしい。

容姿端麗、学業優秀、運動神経抜群、おまけに生徒会長という鬼に金棒どころではない奴である。

「おはよう、高美。いい天気だな。ん？　どうした、そんなに驚いた顔をして。先週の朝礼で発表しただろう、今日から学内風紀強化月間に入ると。」

その言葉に違和感を感じる。

――――このセリフ、いつか聞いたことが無いだろうか？――――

そう思考した瞬間、頭の中でくすぶっていた頭痛が急に自己主張を始める。

――ズキン　ズキン　ズキン――

まるで何かを訴えるかのように。

――ズキン　ズキン　ズキン――

身体を支えることが出来ない。

最高潮に達した頭痛は、俺の足から立つ力を奪う。

あまりの痛みに膝を屈した俺は、その場に倒れこむ。

そんな俺に対して、正雄は、

「では先ずは生徒証の確認だ。言うまでもないが、校則では携帯する義務がある」

なんてチグハグな言葉をかけていた。

――ズキン　ズキン　ズキン――

――ズキン　ズキン　ズキン――

――ズキン　ズキン　ズキン――

視界が明滅する。

何かがおかしい。

何もかもがおかしい。

会話が噛み合っていない。

そもそも会話するということが有り得ない。

思い出せ、お前は既に気がついていたはずだ。

何かが俺に囁きかける。

が、それがなんなのかが理解出来ない。

そもそも、俺にそんな機能は存在していなかったはずだ。

いうなれば真っ白なキャンパス。

それを何かに染められた。

染められた？

……俺（私）は何を考えているんだ？

混乱した思考は、正雄の声で再び引き戻される。

「では先ずは生徒証の確認だ。言うまでもないが、校則では携帯する義務がある」

「では先ずは生徒証の確認だ。言うまでもないが、校則では携帯する義務がある」

「では先ずは生徒証の確認だ。言うまでもないが、校則では携帯する義務がある」

「では先ずは生徒証の確認だ……

延々と繰り返される言葉。

感情の伴わない、機械のような無限リピート。

知り合いが、それも友人が行う奇行に本能的な恐怖が呼び起こされる。

足に力を込める。

頭痛を気合で抑えこむ。

今は一刻も速くここから抜け出したい。

その一心のみに支配された俺は、遂に自らの力で立ち上がり、校門から校舎へと走りだしていた。

背後に、

「では先ずは生徒証の確認だ。言うまでもないが、校則では携帯する義務がある」

という音を聞きながら。

校門から走り去り、校舎の中に飛び込んでからも違和感はなくなることは無かった。

むしろ、違和感は増していった。

色がない。

音がない。

温度がない

そしてなにより……現実感がない。

俺は走りまわる。

その違和感の収束点を探すべく。

おそらく、そこに答えがあるのだろう。

そう何かに衝き動かされながら。

そうして、ついに、違和感の収束点を見つけた。

そこにたどり着いた瞬間。

違和感が消失し、同時にあらゆる色彩、音、感触、温度が消えた。

頭痛も既に消え去っている。

あるのはどこまでもモノクロな世界だけである。

こと此処に至って理解（実感）する。

この『世界』の歪みを。

こんな『世界』が正常なワケがない。

そう思いながらも、俺の目は一点に停められていた。

それは何の変哲もないただの壁。

一階廊下、その先の奥まった場所にある壁だ。

そう、その壁は『何の変哲も無かった』。

色がある。

音がある。

感触がある。

温度がある。

そしてなにより、この『世界』に存在しない『リアリティ』が存在していた。

吸い寄せられる様にその壁へ手を伸ばす。

ひんやりとした感触が手を通して脳へ流れる。

――あぁ――

その現実感に、目から涙があふれる。

そうして、歪んだ俺の視界は、しかし再び壁を写すことはなかった。

本来壁があったその場所、それがなぜか体育倉庫のような場所へと変貌していた。

……何がどうなっているのだろうか？

混乱した頭で考えてみるものの、答えなど出るはずもない。

そうして、ほぼ一瞬で思考を放棄した俺は、先程から敢えて目を逸らしていたものを直視した。

それは、おそらく扉だった。

……青く輝く。

なぜ輝いているのだろう、とか。

その横で立っている人形はなんぞ、とか。

入らなければならないのだろうか、とか。

そんな疑問が浮かんでくる。

……おそらく進まなければ、『話』が進まないのだろう。

そんなメタな思考と共に青い扉へと近づいていく。

あと少し、あと１０センチ……。

――ガツンっ！！――

そこまで近づいたところで、立っていた人形が急に動き出す。

構造上なぜ立っていられるのかわからないフォルム。

というか、そもそも一般的感覚でいうところの人形というよりも、

人の形を象っただけの何かと言ったほうが適当なのかもしれない。

そんな風に、割と冷静に観察しながらも人形の出方を慎重に伺う。

……

……

……

……

……

…

暫し無言の時間が流れる。

微動だにしない人形（？）。

それを見つめる俺という奇妙な構図が５分ほど続いただろうか。

俺は人形へ向けていた警戒を解き、再び扉へと向かい合った。

残り１０センチを詰める。

手が扉に触れると同時、俺の視界は光に包まれ、

よく判らない空間を映していた。

……ここはどこだろうか？

おそらくは廻廊なのだろう、ということだけは判る。

透明な壁が先の見えない闇と廊下を区切っている。

ふと、あることに気が付き後ろを振り返る。

そこには、お約束どおり消えた扉と、予感どおり、付いてきた人形が存在していた。

――まぁいいか――

人形はこちらに敵対する意思はないようだし、先程もいったが先に進まなければフラグが立たないのだろう。

そう自分を納得させ、廊下を歩き出す。

勿論、背後に人形を従えながら。

暫く進むと、聖堂のような場所に出た。

現実感の無い、美しい聖堂だ。

三又の道と、三つの扉。

地面には光り輝く宝石のようなモノが描かれている。

そんな美しい光景は、しかし、無数の生徒たちの亡骸で埋め尽くされていた。

……呆然と立ち尽くしていた俺は、暫くの後正気に戻ると、倒れていた生徒たちの元へ駆け寄った。

「大丈夫か！？　おい、返事をしろ！！」

一人の男子生徒の肩をゆすりながら必死で呼びかける。

が、俺にも判っていた。

その生徒が既に冷たくなってしまっていることなんて。

それでも俺は呼びかけ続ける。

次はどこかで見たことがあるような少女を。

その次はいけ好かないあいつに似た少年を。

次は。

次は。

次は……。

結局、誰もかれもが冷たくなっていた。

初めて体験する人の死。

……初めて？

自分で自分の思考に疑問を持つ。

――ギィィィィィ――――

と、後ろから聞こえた音で思考が中断される。

何事だろうか。

そう思い、振り返ろうとしたところで、背筋を走り抜ける悪寒を感じた。

直感に任せて身を投げる。

と同時、今まで俺がいた場所を剣のようなモノがなぎ払っていた。

――――止まっていては殺られる――――

そう確信する。

武道なんてやったことのない俺だが、そんな俺にすら理解できるほど、目の前の人形は強い殺気を放っていた。

素早く身を立て直す。

僅かに切れていた頬からツゥーと血が流れる。

……一瞬でも遅れていたらという恐怖と生きているという安堵。

そして、否応なしにも自分が殺し合いに巻き込まれているという事実を実感ｓ――ブォン！！――

目の前を先程の剣が再び凪いでいく。

……訂正。

殺し合いではなく、一方的な虐殺であった。

こちらには武器は勿論、武術の心得すらない。

であるならば、足が止まり、あの一撃を受けた時が俺の終わりなのだろう。

――ブォン！！――

避ける。

――ブシュッ！！――

転がる。

――ザンッ！！――

跳ぶ。

……。

……。

……。

……。

が、それも長くは続かない。

目の前には上段に構えた剣を振り下ろそうとしている人形。

特に鍛えているわけでもなく、特別優れた能力も持たない俺では、元より避け続けることなど不可能だったのだ。

世界が酷くスローになる。

コマ送りの映像を見ているかのように、剣の軌跡、人形の動きがはっきりと視認される。

――これほど遅いのならば、楽に避けることが出来たのに――

そう心のなかで愚痴るも、身体はスローな世界と一体化しており、動くことはない。

――あぁ、『また』死んだな――

酷く冷静にそう受け入れる。

そして、目をつむり、最後の時を待t――――ガシィン！！――――

俺のすぐ頭上で金属と金属のぶつかったような甲高い音が鳴り響く。

――――キィン　キィーン　ガキィーン――――

甲高い音楽を奏でていた何かは、次第に俺から遠ざかっていく。

この段になって、俺は自身が死んでいないことに気がついた。

生きている。

であるならば何かしらか理由があるのだろう。

生を諦めていた俺は、しかし目を開け、自身を救った存在へと目を向けた。

それは、人形だった。

先ほどまで俺を殺そうとしていた人形。

それに似た、あの体育倉庫から付いてきていたストーカー人形だ。

手には槍のようなモノをもって剣を持った人形と戦っている。

――――俺を守ろうとしているのだろうか？――――

そんな疑問が頭をよぎる。

が、そんな疑問は考えるまでもなかった。

あの人形は俺を救い、今も俺から離れていくように戦い続けている。

であるならばそういう事だろう。

あの人形は俺を守るために戦っている。

見たところ性能は互角。

というより、もしかしたら同一の存在なのかもしれない。

そう思ってしまうほど両者は似通っている。

違う点があるとすれば、それは手に持っている得物だけだろうか。

人形（剣）が剣を凪ぐ。

それを人形（槍）が剣を下から跳ね上げ、返す動作で相手の頭を叩き割らんと槍を叩き落す。

人形（剣）は頭上から迫る槍を、後ろへ飛び退くことで避け、地面にたたきつけられた槍が引かれる前に人形（槍）の懐へと飛び込んでいく。

迫り来る剣。

それを予想していたかのように人形（槍）は、槍を軸にして、それを背負うかのように身体をくるりと横転させる。

そしてその勢いを乗せ、槍を斜め上段から振り下ろした。

――決まった――

両者の戦いを無心で見つめていた俺はそう思った。

一瞬の後聖堂に響き渡る轟音。

人形（槍）の振るった槍はたしかに人形（剣）の左半身を消し飛ばし、その身を遠く吹き飛ばしていた。

……俺の方へ。

突如目の前に飛来する人形（剣）に、俺は咄嗟に反応することができなかった。

そうして、飛んでくる人形をアホのように見つめていた俺は、人形が未だ意思を持って動いていることを認めた。

人形は、左半身を失いながらもその身を捩り、右手で持った剣に最大の力を乗せてこちらへと向かっていた。

正しく全力全壊の一撃。

おそらく、人形（剣）が最後の力を振り絞って放ったその一撃は、

しかし、俺の身に届くことはなかった。

……そういえばさっきもこんなことがあったな。

なんてことをぼんやりと考える。

目の前には先程の様に俺を守った人形（槍）の姿。

違う点があるとすれば、先程のように華麗に剣を弾くのではなく、俺の目の前に身を投げ出すことで剣を止めたということだろうか？

呆然としている俺の前で、人形（槍）はその役割を終え、段々とその身を薄れさせていった。

そして、残ったのは俺と満身創痍の人形（剣）だけ。

向こうは満身創痍とはいえ、俺の、人間の限界を遥かに超える力を持った存在だ。

おそらく俺は殺されるのだろう。

そう否応なく理解する。

が、しかし、そんなことがあって良いのだろうか？

俺を守るために人形（槍）はその身を犠牲にした。

ここにいる生徒たちも、おそらくは目の前の人形に殺られたのだろう。

その無念。

その想い。

今なお生きている俺が果たさずしては嘘ではないか？

そう自分に言い聞かせる。

大丈夫。

相手は満身創痍。

こちらはオールグリーン。

一撃。

そう、一撃で頭部を破壊すればあるいは。

そう決心し、全身の力を巡らせる。

不思議と気持ちは落ち着き、かつて無いほどに力がみなぎっている。

乾坤一擲。

「この一撃に全てを掛ける！！！…ヌォォオォォオォォオォォオォオ！！！！」

かつてないほどの力の猛りを全て右手に乗せ、咆哮と共に人形へと跳びかかる。

数メートルの間を一瞬にして詰め、右手を突き出す。

狙うは頭部。

その一点のみ。

「オォオォおおおおオォオオオォオォオォりゃァあぁあぁあぁあぁアァァ

！！！！」

常人では視認することすら難しいほどの速度。

岩であろうと砕くであろう威力を秘めて放たれた一撃は、

しかし、それ以上の速さで以て放たれた斬撃によって容易く打ち砕かれた。

一撃。

ただの一撃で、俺の身体はその右腕を切り飛ばされ、返す刃で袈裟に切り捨てられた。

……命が漏れ出していくのを感じる。

それは血液とか体液とかそんなものではなく、正真正銘の命。

俺を構成する重要な要素そのものだ。

薄れ行く意識。

視界は黒く染まり、耐え難い悪寒が全身を走り続ける。

――――俺は……死ぬ？――――

こんな場所で？

こんな時間に？

誰にも知られず？

誰にも覚えられず？

まだ何も行っていないのに？

まだ何も成していないのに？

そもそも……まだ始まってもいないのに？

俺は……死ぬ？

――――否　断じて否！――――

ほとんど感覚のなくなってきた身体に力を入れる。

指先を僅かに動かそうとするだけで、激痛に視界がゆがむ。

視界は真っ赤に染まり、眼球は燃えるかのように熱い。

あまりに痛すぎて、狂ってしまったほうが楽になるのではないかとすら思える。

……だが、それでも。

それ以上に怖い。

痛みが怖い。

感覚の喪失が怖い。

そしてなにより、無意味に終わるということが怖い！！

ここで死ぬのはおかしい。

俺はこんなところで死ぬようなモノじゃない。

であるならば、俺の存在はなんのために。

であるならば、あの頭痛は、彼らは、そして人形（槍）はなんのために。

立て！！

怖くとも良い。

痛くとも良い。

ただ、無意味に終わることだけは断じて許されぬ！！

「よく言った雑種。足掻く生にこそ意味がある。その意気に免じて此度の無礼は見逃そう」

ガラスの砕けるような音と同時、世界に光が灯った。

軋む肉体をどうにか動かし、顔だけを向ける。

頭痛と傷の痛みに耐えながら部屋を見渡すと、部屋の中央に、ぼうっと何かが浮かび上がりつつあった。

その姿は――――――。

一言でいえば黄金。

というよりもそれ以外の言葉では表すことが出来ないほどに輝く少女だった。

黄金の髪。

黄金のプレート。

黄金のオーラ。

何も言葉を発せずとも感じられるカリスマ。

洗練され、研ぎ澄まされた美貌に浮かぶ微笑。

初めて出会ったにも関わらず、俺は理解した。

彼女は王だ。

黄金の女王。

その外見は普通の人間と変わらない。

だが違う。明らかに。

先程の人形（剣）などとは比べ物にならぬほどの、人間を超越した力。

触れただけで蒸発しそうな、圧倒的なまでの力の滾り。

それが身体の内に渦巻くのが否応なしに感じられる。

痛みも忘れ、俺が彼女を見つめていると、何故か彼女も俺を見て固まっていた。

「……何故貴様が……いや、有り得ぬか……まぁ良い」

そうして、再起動を果たした彼女は俺を鋭い目付きで見つめながら、

「問おう。貴様が我を招きしマスターか？」

「マス…ター？」

「王の問に疑問を返すとは、本来であれば首を落とすところだが……
今はその貌に免じて許そう。
では改めて問うぞ、貴様が我を招きしマスターか？」

マスター…主人？

この女王様の？

そんなことが在り得るだろうか？

「あぁその通りだ」

気がつけば思考とは乖離した言葉を発していた。

理性ではなく、本能が。

そうであると。

その答えに満足したのだろうか。

「ふむ。このような些事に我を呼び出すとは万死に値するが……なにやら面白いことになっているようだ。
しばし付き合ってやるとしよう。」

そう彼女が告げた瞬間、左手の甲に激痛が走った。
見ると、手の甲に刺青のようなモノが描かれていた。

「令呪が宿ったところを見るとたしかに我がマスターのようだな。
……一刻の間、貴様が我に仕えることを許そう、マスター」

「……は、はい。おｒ私の名前は此花高美です」

「……コノハナタカミ…か。まぁ貴様がそうだというのならそれで良いのだろう。
それではタカミ、これより……」

彼女が何事かを告げようとした瞬間、つい今まで忘れていた人形（剣）が彼女の背後から斬りかかってきた。

構えは大上段。

跳躍の勢いも加わった一撃は、常人では視認することすら難しいほどの速さで以て放たれた。

が、斬りかかった相手――彼女――は常人ではない。
どころか、遥かに超越した力を持つ存在である。

俺では斬りかかったことしか認識できなかった人形の斬撃を、どこからか取り出した剣で受け止め、これまた何処から取り出したか不明な大鎌でなぎ払っていた。

静寂が聖堂を支配する。

薙ぎ払われた人形は、悲鳴すらあげず、一瞬の内に光となって消え去っていた。

「我の言葉を遮るとはたわけた雑種だ。
木偶は木偶なりに身の程をわきまえていれば良いものを」

そう吐き捨てると、彼女はこちらを向き直り、言葉を告げた。

「タカミよ、我が名はギルガメッシュ。
貴様を我がマスターとして認めよう」

――――せいぜい励めよ――――

緊張が途切れたからか、はたまた単純に限界だったのか、
ギルガメッシュがそう告げたのを最後に、高美の意識は光の中に呑
み込まれていった。

……意識を失う直前。

優しい香りと暖かな感触を感じたような気がした。

第一話（後書き）

後書き

こんにちは。
お久しぶりです。

『人形はいつかたどり着いた』の修正を行っていたところ、完全に別主人公の作品が出来上がってしまい、とりあえずアップしました。

月での聖杯戦争を舞台にした物語ですが、ＥＸＴＲＡは物語のプロローグでしかないという罠。

相も変わらず大風呂敷を広げていますが、『人形はいつかたどり着いた』よりは明確に目標が定まっている分書きやすいです。

とはいっても、完全に『人形はいつかたどり着いた』とは別作品になってしまったため、『人形はいつかたどり着いた』の方は改めて修正していきます。

しばらくはこちらの更新になるかもですが、ご了承ください。

それでは。

第二話（前書き）

この物語はＴＹＰＥ－ＭＯＯＮ作品のＦＦです。
設定に関して独自解釈や独自設定を含みますので、その旨ご了承ください。

第二話

あらゆるものに意味がなく。

あらゆるものに意味がある。

そんな、矛盾した場所。

真っ白に漂白されたそこは、さながらサナトリウムのよう。

そこを瞬く星のような光だけが漂い続けている。

ゆらり、ゆらり。

ゆらり、ゆらり。

ゆらり、ゆらり。

規則性などというものを持ち得ない彼らは、ただ上に、下に。

左に、右に。

ゆらり、ゆらりと漂い続ける。

……どれだけの時間そうしていただろうか？

それは唐突に始まった。

光の粒が円を描きながら回り始める。

幾万幾億……いや、もはやそれは正しく無限。

それほどの光。

始まりは光の筋に過ぎなかった彼らは、今や光の壁となって回転し続けている。

クルクルクルクルクルクルクル

クルクルクルクルクルクル

クルクルクルクルクル

……

……

……

廻り続けている光は、しかし、永遠ではなかった。

段々段々と光は収束していく。

内へ、内へ。

内へ、内へ、と。

そうして暫く。

光は一つの大きな球体へと変貌していた。

そこから溢れる光量はもはや人の認識の外。

美しき光の螺旋。

太陽以上の光を持つそれは、しかし、何かを焼くことなく、むしろ
包み込みながら緩やかに回転を続ける。

可能性を秘めた光。

結果を識る光。

太陽の中心で一際輝くコア（それ）はそういう類のモノである。

そう確信する。

……ところで、先程からこの光を観(み)測ている私（俺）はナニモノなのだろう？

そんな疑問を抱く。

思考も、肉体たる葦も存在しない私（俺）は、しかし、己に問いか

け続ける。

――――――汝は何ぞ？――――――

と。

ふと、あまりの眩しさにその疑問を停止させる。

気がつけば目の前にはぐんぐんと迫り来る太陽。

その圧倒的な光と暖かさで以て私（俺）を包み込まんとしている。

……訂正。

太陽が迫っているのではなく、私（俺）がぐんぐんと引き寄せられているようだ。

私（俺）があの太陽に包まれれば私（俺）は消えてしまう。

その確信がある。

にも関わらず、どうしてだか抵抗する気にならない。

……おそらく。

本能的に悟っているのだろう。

あれは私（俺）で、私（俺）はあれなのだと。

だから、おそろしくはない。

要するに、ただ還るだけの話だ。

眼前には、光の壁。

そうとしか表現できないほど迫った太陽がある。

瞬間。

私（俺）は圧倒的な暖かさに包まれていた。

なにもかもが満たされていくような充足感。

欠けていたモノは全て満たされていき、完全な姿へともどって行く。

……あぁそうか。

欠けていたのは太陽で、私（俺）はその欠片であったのか。

魂が満たされていく中、そう理解する。

と同時、段々段々と意識が薄れてゆく。

私（俺）は始原へと回帰したのだ。

個別の記憶（意思）など必要ない。

私（俺）が失われることへの恐怖はない。

だって、『自分』に帰るのに、私（俺）が失くなる筈がないのだから。

……が、一つだけ心残りがある。

己が消え行くことに異存はない。

でも、この美しい光景だけは覚えていたかった。

その思考を最後に、私（俺）の意識は

ひかり　に　きえ　た。

◆◆第二話◆◆

ふと目が覚める。

と、どこかで嗅いだような独特の匂いが嗅覚を満たす。

……この匂いは病院…だろうか？

そ思い、辺りを見渡す。

どうやら、ここは保健室のような場所らしい。

……意識が曖昧だ。

何故自分はここにいるのだろうか？

そもそも俺は誰だっただろうか？

そんな疑問に思考を傾ける。

と、どこからか強い視線を感じ、伏せていた顔を上げた。

そこには、とてつもなく美しい金細工が立っていた。

スラっとした顔立ち。

黄金を溶かし込んだような髪。

見る者の視線を捉えて離さない紅い瞳。

背はそこまで高くはない。

おそらく俺より１０以上は小さいだろう。

……まぁ、俺は自分の身長なんて知らないのだが。

そこで、目の前の少女を凝視していたことに気がつく。

「あっ……その、すみません」

どこぞの民族宜しく、とりあえず謝罪をしてみる。

すると、目の前の少女はその端正な顔を僅かに歪め、鈴を転がすような声を発していた。

「それが何に対する謝罪なのか……は、貴様自身分かっていようはずもないな」

「？」

初対面の女性の顔を凝視することはたしかに失礼だったが、彼女の様子を見る限りそのことではないようだ。

「えっと。初対面の君の顔を凝視してしまったから、礼を失したかなって、ね」

「……」

言葉を発する度に歪んでいく彼女の顔を見て、声が段々と尻すぼみになっていく。

少女の顔に浮かぶのは怒り……と哀しみ？

「あの…「何も覚えていないのか？　貴様」…？」

俺が言葉を発すると同時、彼女が口を開いた。

……覚えていない？

何を覚えていないのだろうか？

記憶を必死に探る。

目の前の彼女がいう『何も』が何であるかを見つけるために。

が、分かったことといえば一つだった。

今の俺には、覚えていないことを聞くよりも、何を覚えているのかを聞いたほうが早い、ということだ。

「あの、君が何のことをいっているのかよく判らないんだ……その、君は……だれ？」

その言葉を発すると同時、失敗したことを悟る。

何故なら、少女の顔が今までで一番歪んだからだ。

そこに浮かぶのは苛立ちと怒り。

おそらく、彼女と俺は知り合いだったのだろう。

であるのに、いきなり『君は誰？』はない。

きちんと事情を説明してから話を進めるべきであった。

そう理解した俺は、彼女が何事か口を開く前に言語を続ける。

「いや、その。なんていうか記憶喪失？　ここがどこなのか、今がいつなのかは勿論、俺自身が誰なのかすら分からないんだ」

――まぁ、記憶喪失だって理解して、思考している時点で完全な記憶喪失って訳でもないようだが――――というのは蛇足だったので心に留める。

「……なるほど。システムのミスか……おい、ここの管理者、我がマスターに不備があるようだが、どうなっている？」

俺の答えを聞き、とりあえず納得したような彼女は、カーテンの外。おそらく保険医がいるであろう場所に向かって声を投げかけていた。

――システム、管理者、マスター？――――

彼女の口からでたよく判らない単語について考えていると、いつの間にか、目の前に女性が現れていた。

「そうですか？……おかしいですね。身体にも精神にも問題は無いはずなのですが。

セラフに入られた時に、預からせて頂いた記憶（メモリー）の返却は問題なく成功しているはずなのですが……」

そういいつつ、女性は何事かを呟くと、目の前にＳＦに登場するような空間投影モニタを出現させ、巡るましく操作を始めた。

「……」

静寂が保健室を支配することしばらく。

保険医の先生？は操作を辞め、俺の頭へと手を当ててきた。

そう、例えるならば熱を測るときにやるあれだろうか？

保険医の先生の美しい顔が眼前に迫り、別の意味で顔が熱を持つ。横から冷たい視線を感じないでもないが、そんなことを意識する余裕もないまま、彼女の手が頭から外されるまで固まっていた。

「えーと。問題は一切発生していないようなのですが……。こちらが最初に預かった記憶は全て返却されていますし、その返却も問題なく終了しています。

ですから、記憶喪失の方はシステムの問題ではなく、全く別の要因に依るものであると推測されます」

「なるほど、な。まぁ良い。こやつが居ようが居まいが大して変わらぬ。

であるならば、記憶の有無など些細な問題であったわ」

金色の女性は保険医さんの話を聞いてなにやら納得すると、こちらに強い視線を投げかけてきた。

「そういうわけで、だ。マスター。貴様は今からコイツに話を聞き現状を把握しろ。

愚昧の輩などを召し抱えているとあっては、我が沽券に関わるからな」

そういうと、踵を返しながら何処かへと歩き出す。

そうして、保健室のドアに手を掛けると同時、顔だけ振り返って、

「時に、貴様は何故涙を流していたのだ？」

そう尋ねてきた。

……涙？

云われて初めて顔に違和感を感じる。

両の手で頬を触ってみれば、たしかに涙の流れたような跡がある。

……なぜ涙など流していたのだろうか？

「……」

赤い瞳は俺の瞳を捉え続ける。

そうして、

「たぶん……夢のせいだと思います。
なんだかとても綺麗なものをみたような……そんな気がします。」

そう答えていた。

…自分でも自分の答えに驚いているのだから理性からの言葉ではあるまい。

そもそも俺の中に記憶など存在していない。

……ただ、漠然と、黄金の太陽のようなモノが浮かぶ。

そう、まるで黄金の彼女のような。

「そう、か。美しいものは良い。それが価値ある財であればなおさらだ。

美しいものを見て涙を流すとは……多少見る目はあるようだなマスター」

そんな、意味のない感想を述べて黄金の彼女は去っていった。

「……」

「……」

彼女がさった後、保健室には暫し沈黙が訪れた。

「いっちゃいましたね」

沈黙に耐えられずに口を開く。

「えぇ。いってしまいましたね」

そう返って来る。

また、沈黙。

「……ところで、保険の先生……お名前を伺ってもいいですか？」

場の空気を帰るために問いかける。

「あっすみません。自己紹介が遅れましたね。

私はここ保健室の管理を任されているＡＩで、西あゆみといいます。

基本的にここにいつもいるので、

戦いで傷を追った場合やその他何かあればいつでも来て下さいね。

あっでも、特定マスターを支援することは禁じられていますので、その点は御両所ください」

「……とりあえず、西あゆみさんっていうのだけは分かったんだけど。

さっきから出てくる戦いとかマスターとか管理者とかって何のことですか？」

ずっと疑問に思っていたことを尋ねる。

「私のことはあゆみで結構です。

……そうですね。なんらかの理由であなたは記憶喪失になっているのでした。

それでは、これからあなたの現状についてご説明しましょう」

――いいですか？――

とあゆみさんが視線で問うてくる。

それに俺が頷くのを確認して、あゆみさんは話を始めた。

「現在、ここＳＥ．ＲＡ．ＰＨでは聖杯戦争が執り行なわれています。

因みに、聖杯とはいっても、地上の伝承に出てくる聖杯ではありません。

ここで行われているのは地上で行われた聖杯戦争という争いを模倣した、ある種の試練です」

「聖杯戦争……試練？」

「はい。ここで行われているのは、ここの中枢に達するにたる魂を選別するための試練です。

それが、聖杯戦争というわけです。

聖杯戦争はここＳＥ．ＲＡ．ＰＨで執り行なわれ、各マスターに対して一体のサーヴァントが貸し与えられます。

マスター、つまりあなたたちはそのサーヴァントと力を合わせて他のマスターを打倒し、試練を乗り越える必要があります。

簡単に説明するとこういうことですが、御理解いただけましたか？」

「サーヴァントってのは？」

「かつて地上に存在した、あるいは存在したとされる英雄を再現したものです。

つまり、伝説や神話などに登場するモノをクラスに当てはめて再現したモノのことです。

あっ…因みに、クラスというのは聖杯戦争に於けるサーヴァントの分類のことです。

元になった聖杯戦争のルールに従って、サーヴァントは基本的に七つのクラスに分けられています。

即ちセイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーです。

それぞれ、色々と特徴がありますが、召喚されるサーヴァントの特徴に合わせてクラス分けされています。

サーヴァントというのは基本的に伝説の再現なので、伝説にあるような超常的な力を発揮する事ができます。

そのサーヴァントを使役して戦うのが聖杯戦争ということです」

「……要するに、神様の与えた剣で殺し合え、と？」

「剣を与えるのは神様ではありませんが、概ねその通りです」

「マスターはどんな基準で選ばれたんだ？　それも神様のご意思ってやつか？」

「いえ。たしかにこちらからの接触ではありますが、基本的にはここにアクセスできる力を持つ者だけを選別しています。

そういった力を持つ者というのは一般に魔術師と呼ばれています」

「魔術師？　あの口から火を出したり、空を飛んだりする？　魔法使いの？」

「魔法使いという言葉は地上では適切ではないようですが、概ねイメージはその通りです。

そういった力を有する者をここに招き、その魂を競わせる。

それが聖杯戦争。そしてそのマスターです」

「でも、それじゃぁ勝手に呼び出されているってことには変わりはないんだろう？

勝手に呼び出されて殺し合いをさせられて、そんなのって無いだろう！？」

「そうは云われましても、あなたのようなケースは非常に稀です。

魔術師という輩は基本的に生き死にの世界には慣れていますし、探究心のためにむしろ嬉々として参加しますよ？」

絶句。

つまり、戦うことをなんとも思っていないような魔法使いと、一般人の俺が戦わなければならないということだろうか？

「でも、そんなのって……殺されるのは嫌だし、殺すのはもっと嫌だ！

どうにかしてマスターから降りる方法はないのか？」

「残念ながら……一度ここに入った以上は試練を乗り越えることでしか地上へは帰れません」

気まずそうに目を伏せるあゆみさんを見て、あゆみさんの言葉が真実であると悟る。

そうして、視界が絶望に染まっていく。

目覚めてみれば自分が誰かもわからない。

キチガイどもの殺し合いには巻き込まれる。

一体どうしろっていうんだろうか？

「気休めにしかなりませんが、聖杯戦争はあなた自身が殺し合いを行うというよりは、

先程も言ったサーヴァント同士を殺し合わせるモノです。

ですから、あなた自身はもしかしたら殺し合いに参加せずとも良いかも知れません」

おそらくこちらを気遣っているのだろうが、そんなことは何の気休めにもならない。

それに…

「どうせサーヴァントが殺られたら俺も死ぬんだろう？」

「……はい」

だろうと思った。
こんな悪趣味な殺し合いを主催している奴がそんなに甘い存在であるわけがない。

と、そこであることに気がつく。

「あゆみさん。

俺の、俺にもサーヴァントっているのか？」

「はい…？　……あぁ、それも忘れられているんですね？
先ほど出て行ったあの女性があなたのサーヴァントですよ？」

「……はっ？」

あの美しくはあるものの、華奢な少女が伝説の英雄？
女性の英雄なんてジャンヌ・ダルク以外には思い浮かばないのだが……。
ジャンヌ・ダルクといえばキリスト教徒。
つまりは質素倹約が旨であるのだろうが、彼女はそれと対極にあるように思われる。
なんというか、豪華絢爛。
贅沢に贅沢を重ねたようなタイプだとおもうのだが……。

いや、あくまで直感、偏見でしかないのだが、俺の深い部分がその直感を肯定する。

そんなわけで、多分ジャンヌ・ダルクではないのだろう。

となると……だれなのだろう？

頭の中に様々な伝説を浮かべては消すことを続けていた俺にあゆみさんが、

「あの、本人に聞けばおそらく教えてくれますよ？」

と、アドバイスを与えてくれた。

そういわれればその通りだ。

むしろ、本人の名を本人ではなく他人伝いに聞くというのも何となく礼を失している気がする。

そんな訳で、彼女に名を聞こうと決めた俺は、ベッドから立ち上がり、保健室のドアへと向かって歩き出した。

「あの、色々と大変だろうとは思いますが、いつでもここに来てください。

可能なかぎりのお手伝いは致しますので」

そんな言葉が背中越しにかかる。

そういえば、と。気がつく。

そういえば、あゆみさんにはお世話になったのに何の感謝もなしに出て行くというのは不義理だろう。

そう考え、ドアの方へ向けていた身体をあゆみさんの方へと向ける。
彼女は、未だ先程までの位置、つまりベッドの脇に立ってこちらを見ていた。

「色々と教えてくれてありがとうございました。
今から彼女……えーと俺のサーヴァント？を探しに行ってきます。
本当にありがとうございました」

それでは、と頭を下げた後扉へと向かい、扉を開く。
色々とおかしな事態に巻き込まれてはいるようだが、とにかくまずは彼女をさがそう。
そう決める。
何事も一歩一歩、出来ることからしなければならないのだから。

そうして踏み出す。

俺にとっては完全に未知の世界。

聖杯戦争という殺し合いの舞台へと、今。

第二話（後書き）

凝りずに第二話投稿です。

なんていうか文章力の無さ&厨二病が前面に出た内容ですが、そこらへんは生暖かい目で一つ。

今回の話、本当はギルガメッシュ（女）との会話まで行くはずだったのですが、諸事情により断念。

次話に回すことに。

……まぁ、もうそろそろ時間がヤバいってだけなんですが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9233o/

聖杯を抱きしモノ

2010年11月16日18時32分発行